

## 2 石器時代

石器時代は旧石器時代と新石器時代とに分けられます。旧石器時代は二百万年前から始まり新石器時代は一万年前から始まります。旧石器時代はずいぶん長い時代でした。しかしわが国では、旧石器は数十万年前からのものしか見つかっていません。この時代のおわりごろになると、旧石器もだいぶん形がととのいました。新石器時代はわが国では縄文時代からです。

芝崎山 しばさきやま  
大蔵神社や行者堂のある山。

### 芝崎山の槍先

左の写真で見るとおり大きなものです。サヌカイト製  
で完全。石槍は名古屋や辻井からも出ていますが、こんなに大きなものはめつたにあ

### サヌカイト

サヌキ石ともいう。産地は姫路から近い所でも五色台(香川県)、二上山(大阪府)。数万年前こんな所から運ばれてきたのだろう。



### ▲石槍の両面(写真は実物大)

考古学では尖頭器せんとうきという。  
長さ一七・四cm 幅六・七cm

りません。採集したのは八代緑ヶ丘町に住  
んでいた齊藤信夫君（西高出身）、場所は芝崎  
山。これが旧石器なのか、縄文期に作られ  
た新石器なのか、意見の分かれるところで  
すが、打ちかきのぐあいから見て旧石器と  
してもよさそうです。

そうだとすると、数万年前に人がこの山  
にきて、シカやイノシシを追いかけていた  
ことになりました。獲物を見つけてこの槍を  
投げつけました。的がはずれて獲物は逃げ



ました。すぐさま次の槍を投げつけ、こん  
どはうまく命中しました。獲物が大きいの  
で仲間たちもおよろこび。ところで前に  
投げた槍を皆でさがしはじめます。茂みの  
中をかき分けかき分け、さがしてもさがし  
ても見つかりません。特大の特にだいに  
していた槍なのに。残念ですがとうとうあ  
きらめて帰りました。それが数万年後の今  
になって見つかったのです。

## 石斧もあつた

芝崎山 行者堂の北西で下村  
唯雄君（当時西高生）が昭和

二十六年六月八日に採集しました。河原石を打ちかいたものです。これはこの石に木の柄をとりつけて、木を叩き切ったり、土を掘ったりする道具です。しかし歯が少しこぼれています。

ところでこの斧は縄文時代に作ったものか、弥生時代のものか、これ一つだけ見てもはつきりわかりません。遺物が作られた時代をしるには、発掘調査によってどの地層から出てくるかを見なければなりません。地表での採集品は各時代の物がまじりあっているからです。しかしこの石斧は



作りから見ても縄文時代のものだとするのが、おおかたの見方です。

そうだとすると、今から数千年前の縄文時代に人が何かするために、この山へ、この斧をかついでやってきているのです。だが歯がこぼれ切れ味が悪くなったので捨てて帰ったのでしよう。

見失なつた 縄文時代になると弓矢を發明  
矢じり しました。弓矢という飛道具

ができる、狩の能率はぐんとあがります。鳥も射落せます。それで縄文人は矢じりを一生懸命、ていねいに作ります。次の弥生時代になると、他によい道具ができたのでしよう、作りはていねいでなくなります。

### ▲分銅形石斧

長さ一〇cm 幅六・五cm  
河原石をあらく打ちかいている

### 芝崎山・東光寺山・八代山

大蔵神社や行者堂の山をこの三つ  
の名でよんでいる。ところが江戸時  
代の文書には芝崎山の名だけしか  
ない。

東光寺山は今の東光寺山霊苑の山  
が東光寺所有の山なので、その名が  
ついたので、昭和初めまでには行  
者堂のある頂上まで東光寺山とい  
うようになった。

『英城記』（↓65P）には八代山  
の名も書いてあり、この名もずいぶ  
ん古い。

- この二つの時代の矢じりが東光寺山や芝崎山に落ちていました。次の図の1、2、3、5は加藤史郎君（当時西高生）、4、6は松本正信君（当時姫高生）が採集したものです。
- 1 東光寺山山頂で昭和三十四年五月二十四日に採集。一部欠けているが作りは非常に精巧。
  - 2 大蔵神社の東で同年三月四日に。完形で精巧。
  - 3 芝崎山南斜面で三十五年五月一日に。
  - 4 芝崎山南斜面で。先が欠けている。
  - 5 行者堂の北西で三十四年に。
  - 6 芝崎山南斜面で。片面はほとんど加工なし。



こんな石斧も見つかっている

六本のうち1、2、3は縄文期、4、5、6は弥生期のものと考えられます。こういうわけでこの山は、縄文時代からよい狩場だったようです。

昭和十年頃のこと姫路中学の有志がテニスのネットを持って、この山へウサギ狩に行ったことがあります。昭和になっても、この方面は狩場だったのです。



1



2



3



4



5



6

東光寺山と芝崎山で見つかった石の矢じり『姫路古代誌』No.12より